



# 筑紫女学園大学リポジット

## Archaeological Truth and Fiction in "OHGAI NO HI" by Seicho Matsumoto

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/278">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/278</a>

# 松本清張著『鷗外の婢』にみられる考古学的虚実構成

大 津 忠 彦

Archaeological Truth and Fiction in “OHGAI NO HI” by Seicho Matsumoto

Tadahiko OHTSU

## はじめに

筆者の所有する光文社「カッパ・ノベルス」版『鷗外の婢』（第29版、1973年10月5日発行）のカバー折り込み部に、つぎのような評が記されている：

「『鷗外の婢』は出世作『或る「小倉日記」伝』を書き、最近「魏志倭人伝」の謎を学問的に究明した『古代史疑』を書いたこの著者でなければ、到底着眼できぬ独創的な状況設定である。<sup>(註1)</sup>」

『鷗外の婢』は『週刊朝日』（1969〔昭和44〕年9～12月）に発表された清張ミステリー作品であり、作家松本清張（1909〔明治42〕年12月21日～1992〔平成4〕年8月4日）の得意とする作品ジャンル「考古学もの<sup>(註2)</sup>」のひとつでもあると筆者は考えている。作品の発表年に留意すれば、これと相前後する3カ年間だけでも数多くの「考古学もの」を見ることができるし<sup>(註3)</sup>、また、作家の年譜に照合すれば、50歳台後半から60歳台初めという多彩な創作活動の充実した盛期の所産と考えられる。

前記「出世作『或る「小倉日記」伝』」（同前）云々と評されるばかりではなく、森鷗外との関わりについては、「作家清張の生涯は鷗外に始まり鷗外に終わったといていい。<sup>(註4)</sup>」とまで評されるほどである。たしかに、松本清張の「森鷗外」関連代表作品は次のように列挙できるであろう：

- ①「或る「小倉日記」伝」（『三田文学』、1952〔昭和27〕年9月、第28回芥川賞受賞）
- ②『鷗外の婢』（『週聞朝日』、1969〔昭和44〕年9月12日～12月12日）
- ③「削除の復元」（『文藝春秋』、1990〔平成2〕年1月）
- ④「両像・森鷗外」（『文藝春秋』、1994〔平成6〕年11月、遺稿として出版）

松本清張「畢生の仕事」とでもいうべき森鷗外研究線上にあって、同じく「考古学もの」的感興要素が相乗し、したがって読者をいわば二重奏的に魅了する佳作が、ここに採り上げる『鷗外の婢』なのである。

物語主人公浜村幸平は、例えば「逍遙、露伴、漱石、鷗外、藤村をはじめ、四迷、花袋、蘆花など」（168頁）明治・大正期「文豪」、の著作、人物考証を行う著述業者という設定であり、作品中、その性向には清張自身を彷彿とさせるところがある（引用文の頁は前記「カッパ・ノベルス」版『鷗外の婢』、第29版の該当処）：

- 「浜村の筆は決して<sup>ペダゴンティック</sup>術学的なものではない。彼はこういうものを学者の態度で書いてきたのではなく、いわば一般文学愛好家のためにその趣味を供したのである。したがって彼の書き方は多少ジャーナリスティックである。だが、学者が書くしかつめらしい文章よりはときとしてすぐれている」（167頁）
- 「浜村の研究が文献的な資料に限定されず、また、学者の厳密な主題選択にもとらわれず」（167頁）
- 「学界は文献偏重で、足で歩いて得た資料は軽視しがちである。だが、一等資料と目されているものでも、実際は疑問のあるものもあり、足で得た資料でも在来の文献の空隙を埋める貴重

なものがある。学界の「書齋派」は偏見が多い、と浜村は思っている（167頁）

■「鷗外の研究は先生（＝浜村の意、引用者註）もずいぶんおやりになってこれまでも相当発表なさっています」（170頁）

また、この浜村が鷗外の在モト小倉期における雇婢（女中）のひとり「木村元」に関し、「モトのその後を知りたくなった」（196頁）としてまさにこの物語の本格的展開へと繋がる設定は、松本清張の初期の作品のひとつで実体験の写しと判断される「絵はがきの少女」<sup>(註5)</sup>における主人公の場合と同様、「むだなことを調べる愉しみ」（197頁）の具体的発露の好例とみることができると考えられる。

## I. 「鷗外の婢」物語進展の時代設定

物語の展開は、主人公が「木村元」のその後を探索すべく小倉へ赴くまで（前半部）、および、それ以降（後半部）に二分されると考えられる。前半部は森鷗外の在モト小倉時代における雇婢（女中）について、『鷗外全集』所収「小倉日記」を基軸に物語が展開する。「むだなことを調べる愉しみ」（197頁）に呼応するかのよう、主人公浜村は小倉へ赴く。それは「半分は遊びのつもりだった」（197頁）。ところが、止宿先旅館近くの古書店にて「書名に心当たりがあった」（208頁）、「どうも鷗外の日記にこの書名が出ていたような気がする」（208頁）『神代帝都考』を購入し、この本の取り扱う地域についてその古代史・考古学的関心に入り込むあたりより展開が次第にかわり、後半部は推理小説的要素と「考古学もの」としての内容とが混然一体となって当作品物語展開の佳境となる。

すなわち『神代帝都考』を紐帯にして、松本清張流の鷗外研究が当該地への導入の契機となり、そこから古代史・考古学観への展開という構成となっており、結果、「鷗外の婢」における「考古学もの」らしさがじゅうぶんに発揮されているとみなすことができるであろう。文章量を単純に頁数で比較しても後半部は前半部の約3倍である。

作品「鷗外の婢」の考古学的要素の構成具合を検証することが本論のねらいであり、まずはこの物語が進行する時代（年代）の設定を確認しておきたい。物語展開中に、判断の拠り所をいくつか見出すことが出来る。例えば下記の各文である：

■「モトが女兒を生んだのが明治三十三年四月四日だから、その子がいま生きていれば七十歳になる」（198頁）

■「ミツが長命ならば現在七十歳のはずである」（223頁）

これらより算定すれば、1900（明治33）年+70=1970（昭和45）年、となる。

ただし、下記の書き方すなわち、

■「木村モトは明治四十二年に死んでいた。数えで三十歳である」（220頁）

■「モトが死んだときミツは数え年十歳であった」（223頁）

に準拠すれば、前記「ミツが長命ならば現在七十歳のはずである」の「現在七十歳」は「現在数え年七十歳」（傍点は筆者）と読むべきであり、これにより算定すれば、この物語の時代設定は1969（昭和44）年となる。

いまひとつは下記の一節である：

■「なるほど。そうすると文献と現場の状況とは完全に一致するわけですね。先生、応永五年というは何年前ですか？」「年表を見ると一三九八年、いまからざっと五百七十年前だな」（317頁）

これに依り「ざっと」算定すれば、1398+570=1968（昭和43）年、であるが「ざっと五百七十年前」を「正確には五百七十一年前」（傍点は筆者）とすれば、1398+571=1969（昭和44）年、と

なり前記算定と合致する。

したがって、『鷗外の婢』の物語の時代設定を筆者は1969（昭和44）年頃と考えたい。すなわち『鷗外の婢』発表（初出は「週刊朝日」1969（昭和44）年9月12日号～12月12日号）と同年となる。

## II. 「鷗外の婢」が展開する「北九州古代国家論」

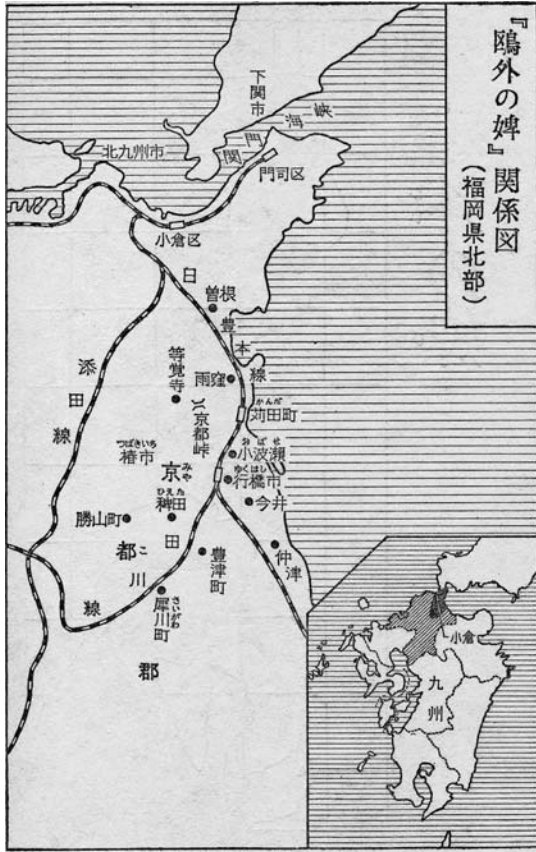


図1. 「鷗外の婢」挿図  
(光文社クッパ・ノベルス版第29版166頁より)

「鷗外の婢」における「考古学もの」的内容は、主人公浜村が古書『神代帝都考』の購入を契機に、藤田良祐著『北九州古代国家論』と遭遇するところより本格化する。『神代帝都考』は、清張自身も所有する実在の書籍であるのに対し、『北九州古代国家論』は、「二百八十ページばかりの新書判」（217頁）で、「発行は福岡市の金弘堂書店」（217頁）という設定の著作物ながら、これは『鷗外の婢』中でのみ存在していくつかの要所を読み得るものであって、その内容は実質は松本清張による古代史論と見做すべきものであると考えられる。ちなみにその出版年は、「藤田氏の『北九州古代国家論』は、その奥付によると、今から八年前の出版となっています。」（298頁）に依拠すれば、先に算出した『鷗外の婢』の物語時代設定である“1969（昭和44）年”より起算して1961（昭和36）年ということになる。

藤田良祐著『北九州古代国家論』は、「豊前京都郡が古代の有力勢力圏だったということを述べ、その勢力がのちに大和に移って日本を統一した王朝の母体となったということを論じたもの」（297頁）であり、その構成は目次として以下のように設定されている：

■「神代帝都考の曙。近代史学からの投射。さまざまなアプローチ。魏志倭人伝の

積。邪馬台国宇佐説の卓見と若干の誤謬。方向・日程の修正。書紀の地名と朝鮮語。古代日韓交渉史と豊前国。移動民族の居住地域は果して筑前地方か。朝鮮系民族と南方民族の接点豊前国。宇狭と豊前地方。伊勢神道と宇狭。御所谷の神籠石。……」（217頁）

藤田良祐著『北九州古代国家論』の要所は、『鷗外の婢』後半部の諸所に、ひとつは“引用文”の形式で見出される。そして、さらには、藤田良祐が浜村幸平に語り聞かせる、という形態で登場する。それらの論旨、論調はいうまでもなく作中人物藤田良祐に語らしめた松本清張自身の古代史論であって、この作家が世に問うて発表した諸書に相通ずるところが散見される。長行になるが敢えて該当箇所を抽出し、そのうちのいくつかについて、特記すべきところをまとめておきたい。以下、各引用文頭に「■著-数字」としたものは『北九州古代国家論』からの引用の意、また、「■話-数字」としたものは藤田良祐による語り箇所の意である。



■著-1「〔近畿地方に成立した古代王朝の前身が、その東遷以前に、北九州の部族連合体であったことは、三世紀半に編纂された三国史東夷伝倭人の条の記事を見ても明らかである。倭人伝は、すでに「邪馬台国」の名で呼ばれる北九州の部族連合体政権を魏の使者の報告通りに記載しているので、この連合体政権は、それより早く、二世紀の後半には存在していたとみなければならぬ。そして北九州で蓄積され発達した、この政権のエネルギーがわが国の中央部である東に移り、現地の部族連合体を吸収して大和古代国家の基礎となったであろうことはすでに多くの学者の説くところである。すなわち畿内政権の故郷は北九州であると無理なく考えられよう。記紀には人名にも地名にもトヨの字が多く出てくるが、魏志倭人伝の「台与」がその音を写したものとすれば、後代に「豊」の漢字をあてはめた地名は北九州にずっと以前からあったものとみなければならない。ツクシが奈良朝期にできた九州の広い呼び名で、豊の国がその中の狭い地域の呼び名であったことから、豊のほうが古い名であり、大化後の行政区画である豊前豊後のうち、豊前がその原体である。それも豊前平野を占める京都郡（旧仲津郡を含む）が中心であったことは、従来史家のいずれも認めるところである。つまり、この京都郡地域は、東遷して成立した大和政権の、母なる地であったことが推定されるのである。豊の国のミヤコは、伝説の景行天皇が熊襲征伐のとき行宮をこの地方のナガオ（長峽）の<sup>あかた</sup>に置いたから起こったというが、ミヤコを皇都の意味にした京都の字を宛てたのは奈良朝で、ミヤコというのはこの地方の独立した古い地名であった。「一体に古い地名は意味のわからぬのが多いことを考えねばならぬ」と津田左右吉博士が言っているとおり、ミヤコ=京都としたのは二、三世紀と八世紀とを突然に接合したようなものだ。古い地名のミヤコは、あるいはヒミコとも関連があるかもしれない。空想を許されるなら、ヒミコは魏の旅行者がミヤコを聞き誤っての訛伝かもしれないのである。ミヤコの地名が皇都として畿内に東漸したのは、民族の移動に付随してあり得ることである。いったい景行天皇の西征は架空の物語で、これは奈良朝に全国統一を誇示するために創作された。景行帝が九州に入った最初の行宮がトヨの国の<sup>ながお</sup>長峽であったことは、この地が大和政権の<sup>かつ</sup>曾ての故郷だったのを現わしている。景行紀によってミヤコ（京都）の名がこの地方に起こったのではなく、五世紀も隔てて忘れかけられている母国の名がようやくにして「地方誌」に書きとめられたのである。明治三十三年に京都郡小波瀬村の挾間畏三<sup>(3)</sup>という人が『神代帝都考』という一書を著して京都郡仲津郡内を記紀の神代史の地名に当てた。ある意味の郷土愛から出たものだが、当時のことで、方法的に稚拙であったのはまぬがれない。今では考古学や比較神話学などの近接学問がよほど進み、また、発掘によって遺物の蒐集が豊富になっているので、古代の京都郡に新しい照射ができるようになった。先覚者挾間畏三翁<sup>(3)</sup>が今日あれば、大きな感慨にふけられることであろう。トヨの国の中心をなす豊前平野は、東は曾根、<sup>かん</sup>苅田、<sup>だ</sup>行橋、豊津の海岸寄り南北の線から、西は勝山町、<sup>さいかわ</sup>犀川町を縦に結ぶ台地下まで広くて、肥沃な地域にわたっている。この平野の中には大きな前方後円墳や円墳が多く存在し、<sup>(4)</sup>苅田町石塚山古墳からは魏晋のころに行われた三角縁神獣鏡が七面発見されている。豊前平野には三つの区域に分れて条里制の遺構がみられ、<sup>(5)</sup>廃寺跡あり、式内社あり、地名の多くは倭名抄に記載されている。また犀川と旧稗田村の境にある丘陵の南面は御所ヶ谷とよばれ、その山嶺には<sup>(6)</sup>神籠石の列石がとりまいていて、列石の延長は約三キロに及び、その水門の石垣は他の各地神籠石の遺構のなかで最も雄大な規模を持っている。<sup>(7)</sup>それより北西に当って筑豊山塊の支脈が平野部に向って扇状にひろがっているが、その台地上は、石灰岩質で（現在、セメント会社により石灰岩の採掘が行なわれている）、山口県<sup>(8)</sup>の秋吉台と同じく無数のドリーネがあり、地表下は鍾乳洞となって、景行紀に伝える土蜘蛛のアオの窟と地形的に合致するものがある。景行紀は地名の由来説話になっているが、豊前の古い地名が豊後の地名と重複しているのは紀の作者の観念がトヨの国に対する曖昧から混乱しているのもあって、さらにこの地名は畿内地方に移されていっている。……

註

- 1 吉田東伍「大日本地名辞書」。津田左右吉「古事記及日本書紀の新研究」その他。
- 2 津田左右吉・前掲書（洛陽堂版）二二七頁。
- 3 明治三十二年八月発行。末松謙澄序文。東京堂発売。
- 4 森貞治郎「北九州古墳の編年史的考察」（西日本史学・第一号）。
- 5 米倉二郎「九州の条里」（九州アカデミー・第一号）。
- 6 「大宰管内志」上巻（豊前志）。
- 7 鏡山猛「北九州の古代遺蹟」。「福岡県史蹟天然記念物調査報告書」。》（226-230頁）

この「■著-1」文うち下記の箇所には註記（7）が付されている：

■「また犀川と旧稗田村の境にある丘陵の南面は御所ヶ谷とよばれ、その山嶺には神籠石の列石がとりまいている。列石の延長は約三キロに及び、その水門の石垣は他の各地神籠石の遺構のなかで最も雄大な規模を持っている。」

これを該当の著に探査すると、「御所ヶ谷」神籠石についての観察表現の援用は堅実であることが確認できる：

■「山頂は犀川町との堺であるが旧稗田村に属する南斜面をとりかこんでいる。列石の延長約三キロに及ぶ。南辺の谷間をふさいだ水門の石垣は、神籠石中最も雄大な規模を持っている。」（鏡山1972年、130-131頁；初版は1956年）

これは『私説風土記』（1976年1月～1977年8月、月刊誌「太陽」連載）においても相通じるところがある：

■「御所ヶ谷（行橋市）の神籠石は二四七メートルの山頂と南斜面をかこむ列石で、その延長約二・六キロ、水門の構造はとくに立派である。そこへ行くには、途中も車が難儀する悪路で、徒歩で登山しなければならぬ。御所ヶ谷から眺める豊津平野の展望は、周防灘を入れて雄大である。山中寂として声なく、山林の上に野鳥が舞っていた。」（『私説古風土記』所収「豊後国風土記」『松本清張全集』55、286頁）

■著-2「『椿市は、書紀にある海柘榴市（ツバイチ）で、地名は、景行紀と豊後風土記とに出ている。しかし、私がさきに述べたように、もとはこの地にあったものが豊の国に対する上代の曖昧な知識から豊前の説話が豊後（大分県直入郡）に転置されたのである。紀は海柘榴市について「海柘榴ノ樹ヲ採リテ椎トナシ兵トナス。因ツテ猛卒ヲ簡シ兵椎ヲ授ケ、以テ山ヲ穿チ草ヲ排シ、石室ノ土蜘蛛ヲ襲ヒ、稲葉ノ川上ニ破リテ其ノ党ヲ悉ク殺ス。血流レテ蹠ニ至ル、故ニ時人ソノ海柘榴椎ノ処ヲ作シテ海柘榴市ト曰ヒ、亦血流ノ処ヲ血田ト曰フナリ」と地名起源を述べ、豊後風土記もほとんど同じ記事を掲げている。」だが、これでは海柘榴の市の説明にはならない。市は物々交換の場所だからである。倭人伝にも「国国ニ市アリ、有無ヲ交易ス、大倭ヲシテ之ヲ監セシム」との記事によっても証される。すなわち各地には民衆が集まる一定の場所があったのである。それには、人々のもっとも分りやすい所が選ばれたろう。いまだ固有の地名のなかった時代、高い樹や珍しい樹の下などは、目印として恰好な場所であったにちがいない。ツバキは当時としては珍しい樹の一つであったろうから、その樹のあるところは誰でも知っており、その下の広いところが市場に選ばれたのである。ずっと後代になって、暦日が制定され、日付が誰の知識にも入ってくると、日時をきめて市場が開催されるようになった。二日市、四日市、五日市、八日市、十日市、二十日市（豊前にも四日市がある）の地名がその起りということは、ひろく知られている通りだが、「ツバキの市」はそれ以前の原始的形態で、古代の交換経済の実施場所であったろう。「最初は種族と種族とが、それぞれの氏族長を通じて交換した。しかし畜群が特別財産に移りはじめると、個別的交換が次第に多くなり、逆に唯

一の形態となった<sup>(3)</sup>」と同一現象がここでも見られたのである。倭人伝に「大倭」がこの市を監したと伝えるのは、すでに権力階級の発生があったからであり、この地方権力者による云い伝えが、のちに中央政府によって官撰の歴史に組みこまれたのであろう。そういう例は多いのである。ツバキが古代に珍しかったのは八、九世紀になっても万葉集などに多く詠まれていることで分る。海柘榴市は大和磯城郡（今の三輪町付近）にもある。これが豊前の地名の東漸であることは、ツバキ市に関連する古地名が長門、周防、阿波、因幡、伊勢の経路に分布していることでも知られる。地名の移動が民族の移動に付随することは、アメリカにおけるイングリッド移住民の故郷地名の例をまつまでもない。また、大和の海柘榴市がその地名の本来の由来を喪失していることは、日本紀略、枕草子に地名しか載せていないことでも分り、これも豊前のはるかに古い証である。大和の海柘榴市が上代の歌垣の場所になったというのは、古代市場としての広場の機能が転化したとみられるが、わずかにその名残りも伝えられないではなかった。要するに、これをもってしても、豊前京都郡が東に移動する前の原始国家の中心地であったと推定できるのである。豊前には中臣郷を中心<sup>(4)</sup>に白鳳奈良朝期の古寺院址としては、上坂廃寺、椿市廃寺、菩提廃寺、馬獄廃寺などがある。

註

- 1 上田正昭「日本古代国家成立史の研究」には「紀」と「豊後風土記」の対照がなされている。
- 2 ツバキは南方より日本列島に移住してきた種族が運び、それよりひろく寒地に分布したといわれる。
- 3 エンゲルス「家族私有財産国家の起源」。
- 4 万葉集には「椿」「海石榴」「都婆吉」として十首以上を載せる。豊田八十代「万葉植物考」など。
- 5 ことに因幡の都婆貞知（ツバキ市）神社、伊勢の椿大神社にその神格化がみられる。
- 6 「名所図会」に海柘榴市は「古には殊に世に聞えし市なりしとぞ」とある。
- 7 富来隆「邪馬台女王国」(235-237頁)

「私説古風土記」は実地踏査という「取材」後に著されたといわれている。しかしながらそれは松本清張にとって自説の根拠の再確認、「念押し」であったらしいことが、「■著-2」との関連から、次の一文に覗い知ることができる：

■『「神代帝都考」からの書き抜きは、無意味に出したのではなく、椿市・朽網の地名のことと、菟田村南原の古墳が古墳時代前期の石塚山古墳であること、御所山・番塚・綾塚・橋塚・丸山



図2. 松本清張所蔵書『神代帝都考』<sup>(註6)</sup>

などの古墳に考古学者の発掘調査報告書が出ていることに関連している。わたしは小倉で育ち、この地域は若いときから歩きまわっているの、つい、なつかしくなって余談的な筆を費やした。『神代帝都考』の著者挾間畏三の孫も小倉で（後略）」（『私説古風土記』所収「豊後国風土記」『松本清張全集』55、280頁）。なお、同頁には著者による下記のような引用がなされている：「○天の岩戸。——京都郡白川村にあり。○天孫はじめて高天原より天降りましし地。——京都郡椿市村大字高来にあり。——○三女神天降りし地。——京都郡小浪瀬にあり。○玉依姫命の山陵は、京都郡菟田村大字南原にあり。土人之れを大塚と称す。即ち葺不合尊の山陵所在地たる大字堤なる北原の丸山を南に距る事十余町。○天照大御山の山陵。——黒田村大字黒田の綾塚なり。○橋塚。——或は高木神の山陵か。○丸山。——天孫の山陵なるべし。○遠見塚。——その塚は宮所の番兵を葬りたる古墳か。企救郡朽網にあり。○御所山。——或は景行の妃、御刀姫より出たる豊

国別皇子の御陵か。周囲に濠を巡らし他の諸陵に比して、規模頗る大なり。小波瀬村大字与原にあり」

■著-3 「『吉田東伍氏の『大日本地名辞書』に人類学雑誌の明治六年の記事と、国志の記事が載せられているのはこの綾塚である。国志云、黒田村の女躰宮の古墳は、窟中七間にして、石棺（長九尺横四尺）あり、其室高広各二間許、方俗石窟を郷屋と呼び、近所諸所に多し、とある。右の記事にある『女躰宮』とは、現在呼名の『女帝窟』である。吉田博士は『女帝』の字を避けて替字したものか。景行紀の北九州巡幸には女酋の名が多くみえる<sup>(1)</sup>。このことは倭人伝の卑弥呼と相通じるものがある。また、窟に住む土蜘蛛（反大和政権の地方豪族）と女酋の名とは関係が深い。この女酋を当地方で『女帝』と呼んだとすれば、古代のイメージを伝え残したといえる。『女帝窟』には特定な人名があてられてない。なかには、斉明帝に比す者があるが、斉明帝は、日本書紀によると、筑後の朝倉行宮で没しているため地理的に違う。この巨石墳は綾塚と同じく全長十五メートルに及ぶが、奥室と前室の隔壁及び前室と羨道との隔壁の部分が長大となり、各々一室を構成するようになったため、各室と羨道との区別が不明瞭になっている、とのことである<sup>(2)</sup>。

註

- 1 田油津媛、海松櫃媛、八十媛、浮穴沫媛など。津田左右吉氏は、ツクシ地方の土蜘蛛に女の名が多いのを豪族間における母権社会の存在と想定している。
- 2 森貞治郎「北九州古墳の編年史的考察」(西日本史学・第一号。)」(247頁)

この「■著-3」文うち下記の箇所には註記(2)が付されている：

■この巨石墳は綾塚と同じく全長十五メートルに及ぶが、奥室と前室の隔壁及び前室と羨道との隔壁の部分が長大となり、各々一室を構成するようになったため、各室と羨道との区別が不明瞭になっている、とのことである<sup>(2)</sup>。

これを該当する論文に確認すると、原典の関連箇所は下記のようにになっている：

■京都郡黒田村の綾塚、橋塚の如き、石室の全長五十尺（約十五メートル）に及ぶ壮大な巨石墳であるが、次第に奥室と前室、前室と羨道との区別が不明瞭になって来る。それは奥室と前室の隔壁及び前室と羨道との隔壁の部分が長大になり各々一室を構成するようになるためである。(森1949年／森1983年、345頁)

前出「■著-1」の場合同様に、これらの古墳についても「私説古風土記」には下記のような言及が見られる：

■行橋に近い旧黒田村（いまの勝山町）の円墳の橋塚は石室の長いことが特徴となっている。小学校の運動場の隅にあって運動用具の倉庫になっていた。戦時中わたしはここをカメラで撮っているとき、スパイではないかと怪しい眼で見られたことがある。綾塚は近くの山麓にある。(「私説古風土記」所収「豊後国風土記」『松本清張全集』55、285-6頁)

■著-4 「『古事記の巻頭についている太安万侶の序文にあるように、古事記は稗田阿礼の誦する先紀旧辞を安万侶が編集したことは周知の通りである。時ニ舎人アリ、姓ハ稗田、名ハ阿礼、年コレ二十八、人ト為リ聡明とあるが、当時の姓は地名からきているのが多いから稗田は阿礼の出身地名である。現在、奈良県の天香久山に近い稗田がそうだとされて、その指標も建てられているが、これも豊前の稗田の地名が東に移されたもので、部族の移動を語る。仲津郡には倭名抄中臣郷がある。中臣氏は、古代に神祇をつかさどった。中臣は仲津臣で、仲津とナカツヒメ（仲媛）とは、関連があるかもしれない。ナカツヒメは応神天皇の皇后で、仁徳帝を生



む。旧稗田村領の御所ヶ谷に神籠石がある。神籠石の名は筑前の高良山（久留米市付近。高良神社あり）の列石遺跡から起こっているが、八カ所のうち七カ所までが九州北部に集中している。高良神社は高麗神社で、朝鮮系である。神籠石の築造目的については明治中期から、祭祀説と山城説とが考古学界で長く対立し、大正初期に論争が起こったが、いまだ決定していない。朝鮮の山城の影響があることは確実。御所ヶ谷の名は、景行帝の駐留地と考えられたところから起こったのだが……」(253頁)

■話－1 「魏志倭人伝に書かれたころの北九州は、多くの共同体に分かれていたと思いますね。それを勢力圏といってもいいし、クニといってもいい。大まかにいって九州圏、出雲圏、吉備圏、畿内圏、尾張圏といったエリアがあったが、それはまたそれぞれがいくつもの小勢力圏に分かれていました」(268頁)

■話－2 「倭人伝の女王国に含まれた奴国、不弥国、投馬国はじめ斯馬国とか伊邪国とかいう二十数国はみんなそうだったと思います。だが、これを現在の遺跡とか発掘品とか古墳群などからみて大別すると、筑前勢力、筑後勢力、豊前勢力、豊後勢力、肥前勢力といっていんじゃないですかね。肥後から南の狗奴国圏は別にしてね。その北部九州のなかでもこの豊前勢力はなかなか大きな力をもっていて、その中心が京都郡の豊前平野だと思うのです。古墳は二百以上あって、そんなに一つのせまい平野に集まっているところはほかにないし、前方後円墳も前期形式で、円墳は巨石墳ときている。この巨石墳はあきらかに朝鮮のドルメンの技術影響をうけていますよ。ただ、残念なことに、この地方は完全な発掘がなされていないのです」(268頁)

■話－3 「(「記紀の神話の地名が京都郡にずいぶん多い」に対して)「そうなんです。吉田東伍博士もその点は『奇とすべし』と『大日本地名辞書』に書いていますね。そのことを主に書いたのが挾間畏三さんの『神代帝都考』ですが、部分的には無理があっても、やはり先覚者です」(268-269頁)

■話－4 「(「コジツケの地名解釈が多い」に対して)「それは明治三十二年に書いた本ですからね、仕方がありません。景行紀や風土記の地名伝承をそのまま鵜呑みしたところがあります」(269頁)

■話－5 「(「最近の学説もよく読んでおられる」に対して)「明治時代と違って古代史学や考古学もずいぶん発展したし、本や雑誌が多くなりましたから。わたしは自著の引用部分にはできるだけ出典を挙げておきました。興味を持たれる読者の参考にもと思ひましてね」(269頁)

■話－6 「(「神代史の地名と似ているというのは、豊前の古代と大和政権とどういにかかわり合いがあるのですかねえ?」に対して)「その前にですな、言いたいのは、倭人伝も伝えているように倭国に二、三十年も大乱があったのち卑弥呼が女王になって一応おさまった。卑弥呼の死後は台与が女王になった。けど、そのあとも大乱があったと思いますね。通説では狗奴国との戦争だと言っていますが、そうじゃなくて、やっぱり内乱というか、北部九州圏内の各勢力圏どうしの争闘だったと思いますね。女王と倭人伝には出ているが、実は巫女で、政治的な権力はありません。宗教的な存在で、各勢力のバランスの上に擁立されたようなものです。バランスがくずれるとたちまち廃止ですよ。女王は台与だけで終わったと思います」(269-270頁)

■話－7 「(「バランスが崩れたのは豊前勢力が強大になったからですか?」に対して)「そうです、

そうです。豊前勢力が強くなって邪馬台連合国の中心となった。つまり山門郡を中心とした筑後勢力圏にとって代わり、北部九州を統一したのですな。このことが中国に知られなかったのは、中国の動乱で魏や晋が滅亡したりするようなことがあって百年ほど通交が絶えていたからです。そのあと宋書に倭の讚以下の五王が見えるまではね。つまり、わたしの考えではね、豊前勢力を中心とした九州勢力が畿内勢力を征服して、大和政権の主体になったと思うのです。その理由としてはね、神代紀には筑後や筑前地方の地名が少しも出てこない、みんな豊前の京都郡のものばかりじゃありませんか。あれは日向の地名だというひとがあるかもしれませんが、わたしの本にも書いておいたように、八世紀にもなると、その前のトヨの国のイメージが大きくなって、豊後も日向も一緒に含まれてしまった。つまり、九州の東部が一つの勢力圏だったと考えられるようになったからです。だから、京都郡の地名が豊後にも日向にも重複して散在したわけですね。いいですか、その傍証としてはですな、豊後や日向の古墳からは漢鏡はもとよりのこと、魏、晋のころの鏡は一面も出ていないのです。京都郡の古墳からは魏、晋の三角縁神獸鏡が何枚も出ているんですからね。もちろん、これは豊前勢力が邪馬台国に強大になる前に伊都国や奴国からもらうか取るかしてきたものでしょうがね。当時から、豊後や日向は邪馬台連合国の構成勢力になることができないほど後進国だったのですよ」(270-272頁)

- 話－8(「九州の東部が豊前の勢力範囲一色になったという傍証でもありますか?」に対して)  
「それはですな。例の櫛描文土器です。まず、弥生期初めごろの土器が北部九州から急速に中国地方を経て畿内にひろがり、次は地域差の特徴、つまりローカルカラーの時期があって、弥生の末期ごろには畿内の櫛描文土器から瀬戸内海を通過して四国の西端から九州の東部に達しているのです。分布がそういうふうになっている。大和政権ができたと思われる弥生の末期に畿内から東九州をつなぐ櫛描文土器の帯が、ほくの説を示唆しているようですな。そのころ、北部九州や西部九州はこの文化の波にとり残されている。大和政権と豊前政権の同族意識、いわば大和政権の故郷に向かう文化の回帰といいますかね」(272頁)

藤田良祐が浜村幸平に語り聞かせた諸説のうちこの「■話－8」の趣旨は、松本清張により諸処にて言及されている：

- 弥生式土器の変遷 「土器のほうからいうと、前期のもの(従来は遠賀川式と総称されたが、いまは板付Ⅰ式といっている)が急速に瀬戸内海沿岸地域を通過して近畿地方から伊勢湾沿岸に達する。それより以東へは容易にすすまずに停滞し、中期になると逆に西へあともどりしてこんどは各地方で地域性の意匠を身にまといながら、瀬戸内海を通過して九州の東部(大分県)に上陸する。これはだいたい前にちょっとふれた。考古学者は、畿内の初期弥生式土器「畿内第Ⅰ様式」を三段階に分け、それが「ヘラ描き文から櫛描き文へ」と移る中期の「畿内第Ⅱ様式」となり、それをまた四段階に分ける。畿内や山陽・北四国で、ローカルカラーを身につけた中期後半の弥生式土器(櫛描き文)は、大分県の国東半島に上陸すると、その主流は北部にむかわずに西や西南にひろがる。(中略)ところが、国東半島に上陸した畿内式土器は前記のように九州北部にはあまり多く入らない。この時期より前から朝鮮海峡沿岸地帯の北九州には須玖式土器といって、赤く色を塗って磨いた美しい壺形土器や大きな甕の土器があらわれていた。」(「邪馬台国」『松本清張全集』55、109頁)

上記引用文中の「これはだいたい前にちょっとふれた。」とは、該当箇所を検索すれば以下の件と判断される：

- 「福岡県の東部に遠賀川という玄界灘と筑豊炭田地域とを結ぶ川がある。石炭のさかんころは、石炭船がこの川を上下して港への輸送にあたったものだ。その河口にちかいところに、立

屋敷やしきという小さな村落がある。わたしのわかいころにみた立屋敷は、川土堤の草むらにあそぶ牛のむれと、いちめんの田圃たんぼをみはるかす農家の点在だけであつた。その遠賀川畔の立屋敷遺跡から出土した土器は弥生式の初期に属し、遠賀川式土器かめかんという。甕棺が多く出土する福岡市板付空港近くの弥生式遺跡からも土器が出て板付式土器といわれ、遠賀川式より少し古いとされている。こういった初期の弥生式土器文化は、おそらく三十年ぐらいのうちに伊勢湾地方までつたわるが、そこで足ぶみし、停滞する。それより東のほうにはなかなかすまないのである。すすまないだけでなく、弥生式土器は、近畿地方からUターンして、また瀬戸内をとおつて九州の国東半島くにさきに上陸するのである。このあいだ、それぞれ地域的なカラーを身につける。」  
(「邪馬台国」『松本清張全集』55、11頁)

遠賀川流域の描写が「わたしのわかいころにみた立屋敷は」云々といった具合に回想的・実体験の表現がなされているこの一節には、松本清張の短編作品のひとつ「途上」(初出掲載誌：『小説公園』1956〔昭和31〕年9月)の冒頭部分を想起させるところがある：

■「ここまで来たのも目当があつた訳ではない。強いていえば、十数年前、N博士の「日本原始農耕文化の研究」の助手をしていた頃、この土地に近いO川に友人と発掘調査に来た思い出に、心がつながつたのかも知れぬ。その時の川の景色も覚えている。河床ろてきに蘆荻がしげり、潮の香が海から川面に上つてきていた。腰まで水に浸つて、いわゆるO川式土器・石器の遺物を採集した。」

「途上」文中の「O川式土器」は「遠賀川式土器」のことと解せられる。なぜならば、「遠賀川畔の立屋敷遺跡から出土した土器は弥生式の初期に属し、遠賀川式土器という」、すなわち「前期の弥生式土器を遠賀川式土器とよぶことがあるのは、この遺跡が遠賀川の川床に位置することによる」<sup>(註7)</sup>等々に符合すると判断されるからである。

「途上」の発表年は、藤田氏の『北九州古代国家論』の推定し得る発行年1961(昭和36)年を遡る。すなわち、弥生前期土器についての“藤田氏の持論”つまり松本清張の論は、立屋敷遺跡の考古学的重要性を十二分に意図してのものであつたと理解し得る。それが『鴉外の婢』(発表年および筆者の想定する物語の時代設定年はいずれも1969〔昭和44〕年)においてもまた確認され、物語登場人物の持論として援用されたと考えられる。

■話-9(「豊前の地名の東遷説、記紀の地名記載ともそれが関連するのですか?」に対して)「と思いますね。人間は新しい土地うつに遷つた場合、どうしても故郷の地名をつけますからね。わたしが本にも書いていたように神代紀の重要な神々にはトヨの名が多い。ツクシやヒムカの名が付いていますか。あまりありませんね。ツクシもヒムカも『筑紫の日向の橘の小戸の櫛原に』とミソギのところたればなで小地名として突込みで出てくるわけです。トヨはトヨアシハラノミヅホノクニと大きく国名として出るほか、いっぱいあります」(272頁)

■話-10(浜村の『日鮮同祖論』からの知識)「天孫が降臨したという日向の高千穂の添山峯(ソホリノヤマ)が古い朝鮮語のソフルソフルで大きな村という意味、京城ソフルがそこからきていること、コホリ(郡)も朝鮮語だということ、ムレが水に関係した言葉で、いまも牟礼むれの地名が日本各地に少なからずあることなどですね」(273頁)

■話-11「豊前の地名も当然に古い朝鮮語が多いのですよ。(中略)仲津郡も朝鮮地名のナ(奴)からきているので東夷伝辰韓の条には奴国の名がある。倭人伝の奴国、蘇奴国と同じで、これがのちの籬なの県となる。ナに助辞のガあがたが加わつてナガという名詞になり、さらにそれに後世のノおきつなみに当たるツ、ほら、沖の浪を沖津波などというあのツですよ、ナガにツが加わつてナカツになったのです。天智天皇紀の長津ノ宮ながつの濁音が除かれたのです。挾間翁が天孫三代の地として

等覚寺のある山は普智山<sup>ふち</sup>というのですが、このフチはフルからの転訛です。天孫降臨の山を古事記では高千穂<sup>くしふる</sup>の櫛触峰<sup>くしふる</sup>としている。クシは朝鮮の同系の天降伝説クシ（亀旨峰）からきていて、フルはソフルのフルです。普智山を天孫降臨の地に擬した挾間翁の説はおかしくないわけです。こういうことは漢字で見るとわからない。いいですか、別府から阿蘇に行くハイウエーは久住高原<sup>くじゅう</sup>を通っている。九重山<sup>くじゅう</sup>が近くにあるからですが、クジフルがつまってクジュウとなり、それを漢字にあてて九重としたのが、さらに書きやすく久住としたのですよ。いまにヒサズミなどと読むようになるかもしれませんね。そういえば京都郡に和名抄高来郷<sup>たかく</sup>といのがある。のちの高来村ですが、これはタカクではなく、もとはコウライだったのです。朝鮮の高麗<sup>こうらい</sup>を漢字の高来にあてた。それが和訓<sup>よ</sup>みでタカクになったのです。仲津郡に<sup>あさみ</sup>些見郷という和名抄地名がある。アザミはいうまでもなくアヅミです。のち信濃に植民地をつくった安曇部族<sup>あずみ</sup>ですね。アヅミは南方の海洋民族といわれている。行橋から国道二百一号線で仲哀トンネルをすぎると香春<sup>かむら</sup>というところがあります。春をハラとよませ、原をハルとよませるのは九州の特徴です。ハルはフルの転訛です。語尾に、ハルのつく地名は朝鮮系と思ってよろしい。フルはフリともいう。肥前の背振山<sup>せぶり</sup>、筑前の加布里<sup>かぶり</sup>などというのがある。ま、そんなわけで、香春には香春嶽<sup>かむら</sup>があって、これが辛国<sup>からく</sup>の神さまを祭っている。駕洛国のことすな。豊前風土記には新羅<sup>しんら</sup>の国からこの川原<sup>かわはら</sup>に來た人が鹿春<sup>かむら</sup>の神になったとある。延喜式には辛国息長大姫神<sup>からくにおきながたらしひめ</sup>を祭るとしている。これは神功皇后の名ですが、景行天皇も大帯日子<sup>おおたらしひこ</sup>でタラシがつく。景行の子の成務天皇<sup>むかたらしひこ</sup>も若帯日子<sup>わかたらしひこ</sup>とタラシがつく。仲哀も足仲津彦<sup>たらしなかつ</sup>でタラシがつく。だから景行天皇とその子のヤマトタケルとの全国平定説は、タラシ系民族の中央統一ではないか。この朝鮮のタラシ系を重視している学者もあります。だから、この豊前が大和政権の故郷であるというのはおわかりになると思います。」(273-275頁)

■話-12 (史跡指定に関して)「(前略)稗田村には御所ヶ谷<sup>こうごいし</sup>の神籠石<sup>こうごいし</sup>があるんです。その水門の築石は他の神籠石の中で最も規模が大きいです。神籠石は肥前<sup>おびくまやま</sup>の帯隈山<sup>おびくまやま</sup>とオツボ山の神籠石が発見されて山城説が非常に有力になりましたな。御所ヶ谷は馬岳の背面でしてね。馬岳には近世に豊後の大友方の支城があったのです。それを豊臣秀吉が九州征伐の際に攻めた。太閤記にも出ている合戦ですよ。そういう点からしても、御所ヶ谷の神籠石は山城すな。景行天皇の行在所説があるのも無理はありません。」(276-277頁)

■話-13 (馬岳に関連して)「馬岳<sup>うば</sup>は姨岳<sup>おん</sup>だと思うのです。豊後に祖母山<sup>そぼ</sup>というのがある。この祖母を間違えて、漢字の姨<sup>おん</sup>に当て、ウバがウマになったのです。金沢博士の説だと所夫里は古朝鮮の扶余<sup>ふよ</sup>の別号だそうで、記紀がつたえる高千穂<sup>そぼり</sup>の添山<sup>そぼり</sup>峯<sup>かみ</sup>です。奈良県の添郡も同じ語源。だからソホリ岳を祖母岳と漢字にし、一方では字面から姨岳となり、一方では音よみから馬岳に変化した、こういうわけです。この福岡県田川郡にも添田<sup>おん</sup>があります。」(277頁)

### Ⅲ.『北九州古代国家論』における「リアリティ」の源泉

「鷗外の婢」が発表された当時（初出は『週刊朝日』1969〔昭和44〕年9月12日号～12月12日号）、年譜に照合すれば、松本清張はすでに九州の地を離れ（1953〔昭和28〕年）上京して久しく、気鋭の作家として多彩な創作活動に邁進する真っ只中であつた。「一九六六年（昭和四十一年・五十七歳）十二月、「砂漠の塩」が第五回婦人公論読者賞を受賞。「古代史疑」を「中央公論」に連載し、本格的に古代史に仕事の領域を広げる。」（中川2005年）とも解されている。たしかに、「古代史疑」は、自他共に認める「清張考古」の一集大成であり、「邪馬台国に関連したわたしの新しい見方は、八年前の『古代史疑』（昭和四十三年、中央公論社刊）にも先駆的に出している」（「邪馬台国」『松本清張全集』55、145頁）、あるいは「これはわたしが拙著『古代史疑』（中央公論社刊。昭和四十三年。雑誌連載は昭和四十一年）以来主張していることである。」（同前、38頁）と常々再確認がな



されるのである。「古代史疑」発表前後5年間に限っても、例えば「葦の浮船」(『婦人倶楽部』1966 [昭和41]年1月~1967 [昭和42]年4月)、「瑠璃碗記」(『太陽』1966 [昭和41]年7月)、「月」(『別冊文藝春秋』1967 [昭和42]年6月)、「土偶」(『小説新潮』1967 [昭和42]年12月)、「内海の輪」(原題「霧笛の町」『週刊朝日』1968 [昭和43]年2~10月)、「鷗外の婢」(『週刊朝日』1969 [昭和44]年9~12月)、「火神被殺」(『オール讀物』1970 [昭和45]年9月)、「巨人の磯」(『小説新潮』1970 [昭和45]年10月)など、とくに1950年代半ばから1970年代後半までに集中する「考古学もの」量産のひとつのピーク時を形成しているともみられる。この「考古学もの」創作活動旺盛時、きっと常々意識のうちにあって作品中に具現化した「九州」へのこだわり<sup>(註8)</sup>を、「古代史疑」発表を契機として構成要素にあらためて強調したのが「鷗外の婢」における考古学的要素であり、それは同時に「鷗外研究」という松本清張にとってのいまひとつの原点への回帰を伴わずにはおれなかったであろう。これら「九州」、「鷗外研究」、「考古学」が融合し、なおかつ、この作家独自の「リアリティ」志向が加わった時、

「鷗外の婢」物語舞台における在九州時代の実地踏査が功を奏したのであろう。そのことが「私説古風土記」の随所に伺われることは、既に言及した通りである。敢えていまひとつ実地踏査の様を確認すれば下記のような件を見出すことができる：

■——杉坂山の金辺峠は、現在では北九州市小倉区の城野から田川郡香春町までまっすぐについた国道三二号線上のトンネル(金辺隧道)になっているが、わたしが少年のころは旧街道<sup>おいほぎ</sup>で、全山が杉に蔽われた急坂で、追剥が出そうなくらいす暗かった。近道はさらに急峻で、これをとると、乗っている自転車を肩に担いで木の根を踏み、石ころに足を取られ、崖をよじのぼって越さねばならなかった。この稿を書き、はからずも五十年前の自分を思い出した。(『私説古風土記』所収「豊後国風土記」『松本清張全集』55、295頁)

「鷗外の婢」の物語舞台は北部九州において濃密な遺跡分布域のひとつである(図3)。ここに親しんだ経験は、確かにその後「清張史眼」に具現化され、不可避の邪馬台国論を形成していったに違いない。



図3. 行橋西部における遺跡分布状況(古墳時代)<sup>(註9)</sup>

## 【註】

- (1) 平野謙（文芸評論家）による。本書と同じく所収された作品「書道教授」についての評として、「私は、久しぶりにこの著者の推理小説を読んで、こういうまったく作風の異なる作品を悠々と書く作家的埋蔵量の豊富に、改めて一驚したことである。」と締めくくられている。なお、「古代史疑」は『中央公論』（1966〔昭和41〕年6月～1967〔昭和42〕年3月）に初出。
- (2) 考古学や考古学者に関わる小説。したがって、明確な峻別は難しいながら、史観・史論を主たる展開とする例えば「古代史疑」、「古代探求」（『文學界』1971〔昭和46〕年1～12月、1972〔昭和47〕年2～5月、1972〔昭和47〕年7～9月）、「遊古疑考」（『藝術新潮』1971〔昭和46〕年1～5月、7月～1972〔昭和47〕年8、10、11月）、「清張通史」（『東京新聞』1976〔昭和51〕年1月～1978〔昭和53〕年7月）、「古代史私注」（『本』1976〔昭和51〕年2月～1980〔昭和55〕年12月）等は除く（カッコ内は初出誌、以下同様）。
- (3) 例えば下記諸作品である：「葦の浮船」（『婦人倶楽部』1966〔昭和41〕年1月～1967〔昭和42〕年4月）／「瑠璃碗記」（『太陽』1966〔昭和41〕年7月）／「月」（『別冊文藝春秋』1967〔昭和42〕年6月）／「土偶」（『小説新潮』1967〔昭和42〕年12月）／「内海の輪」（原題「霧笛の町」『週刊朝日』1968〔昭和43〕年2～10月）／「鷗外の婢」（『週刊朝日』1969〔昭和44〕年9～12月）／「火神被殺」（『オール讀物』1970〔昭和45〕年9月）／「巨人の磯」（『小説新潮』1970〔昭和45〕年10月）／「神の里事件」（『オール讀物』1971〔昭和46〕年8月）／「礼遇の資格」（『小説新潮』1972〔昭和47〕年2月）／「熱い絹」（『小説現代』1972〔昭和47〕年2月～1974〔昭和42〕年12月、中断後、『報知新聞』1983〔昭和58〕年8月～1984〔昭和59〕年12月）／「高台の家」（『週刊朝日』1972〔昭和47〕年11～12月）
- (4) 『松本清張事典』、2005年、237頁。
- (5) 「サンデー毎日」特別号（1959〔昭和34〕年1月）所収の短編小説。絵はがき収集好きの主人公（＝小谷亮介）が、そのうちの1枚に写り込んだ少女の消息を探查する物語。作品の主人公が絵葉書に映し込まれた人物に関心を抱く物語設定は、場所こそ違え、松本清張自身の少年期実体験に拠っていると考えられる：松本清張 2002 「[再録・旅のエッセイ 雑誌「旅」より] 時刻表と絵葉書と」（『松本清張研究』第3号所収（初出は『旅』1956〔昭和31〕年9月号）。
- (6) この掲載図版は「北九州市立松本清張記念館」提供の写真に拠る。なお、当館の小野芳美氏によれば、挟間畏三著『神代帝都考』は、明治32年発行版1冊のほか、昭和39年発行の復刻版2冊が松本清張蔵書として現存する由。
- (7) 水野清一、小林行雄編『図解考古学辞典』（第7版、1974年、東京創元社、初版は1959年）所収「立屋敷遺跡」の項（小林行雄）より。なお、同書所収「遠賀川式土器」の項（小林行雄）によれば、「立屋敷遺跡は遠賀川の河原にあるため、遠賀川遺跡ともよばれていたから」、「小林行雄は、これに遠賀川式土器の名をあたえた」。
- (8) 「なにかというと「九州」が出てくるのも、名も無く貧しいが俗な功名心はないわけでもないデザイナー・岡野正一が仕事で悩むのも、作者の生活史に裏打ちされた得意芸のうちである。」（小関三平・「夜光の階段」解説、『松本清張全集』46所収）
- (9) 『竹並遺跡』（竹並遺跡調査会、1979年、寧楽社）所収地図より改変。地図下方中央部、台形状に区画されたところは「御所ヶ谷神籠石」、その右（東方）に「馬岳」。地図なかほどが「稗田」、その西方の「黒田」の山裾に「綾塚」（地図中表記は「綾塚古墳」）、「橋塚」（地図中表記は「橋古墳」）。地図なかほどより上（北）、西寄り部が「椿市」である。

## 【参考文献】

- 鏡山猛 1972『北九州の古代遺跡』（日本歴史新書 増補版 重版）至文堂（初版は1956年）  
中川里志 2005「国民的作家松本清張の生涯とその世界」（大津忠彦編著2005『小説に読む考古学 松本清張文学と中近東』〔中近東文化センター〕8～11頁所収）  
森貞次郎 1949「北九州古墳の編年史的考察 豫報」『西日本史學』創刊號 3～32頁 西日本史學會  
1983『九州の古代文化』六興出版

（おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授）